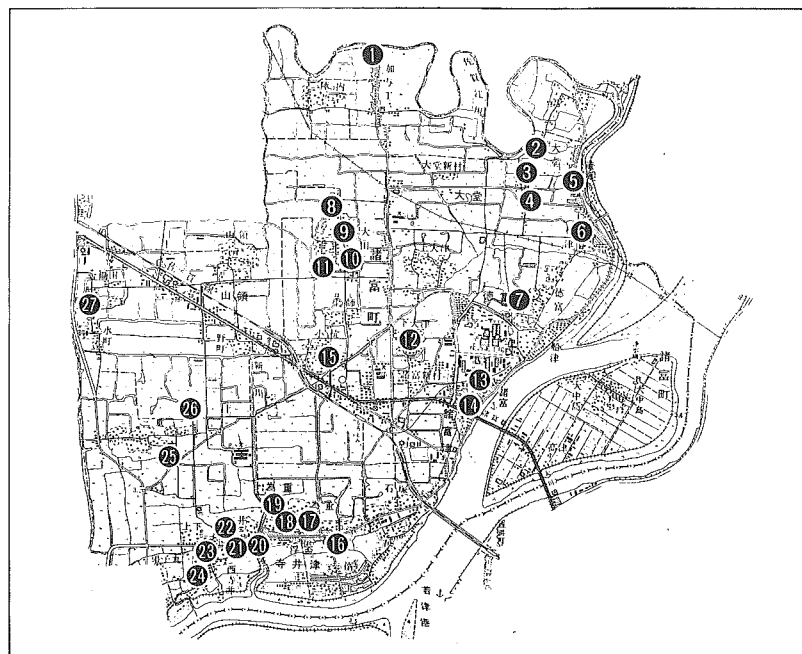


# 人物



慰 靈 祭 (昭和31年・大堂神社)

諸 富 町 社 寺 分 布 図



## 社 寺 名

- |                   |                 |
|-------------------|-----------------|
| ① 明 円 寺 加 与 丁     | ⑮ 專 念 寺 小 杭     |
| ② 教 樂 寺 大 堂 村     | ⑯ 勝 浮 院 浮 盃     |
| ③ 永 仁 寺 〃 〃 〃     | ⑰ 妙 光 寺 為 重     |
| ④ 大 堂 神 社 〃 〃 〃   | ⑱ 昌 善 寺 祈 禱 所 〃 |
| ⑤ 礼 教 寺 大 堂 津     | ⑲ 多 聞 院 〃 〃     |
| ⑥ 法 泉 寺 橋 津       | ⑳ 光 專 寺 東 寺 井   |
| ⑦ 西 田 神 社 德 富 二 区 | ㉑ 万 福 寺 西 寺 井   |
| ⑧ 太 田 神 社 太 田     | ㉒ 安 竜 寺 〃 〃     |
| ⑨ 慈 広 光 院 〃 〃     | ㉓ 光 德 寺 〃 〃     |
| ⑩ 宝 蓮 寺 〃 〃       | ㉔ 妙 誓 寺 〃 〃     |
| ⑪ 西 蓮 寺 〃 〃       | ㉕ 円 城 寺 三 重     |
| ⑫ 東 光 寺 下 大 津     | ㉖ 新 北 神 社 〃 〃   |
| ⑬ 蓮 光 寺 諸 富 津     | ㉗ 円 光 院 福 田     |
| ⑭ 正 立 寺 〃 〃       |                 |

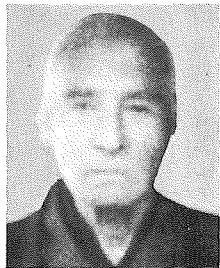
本編でとりあげた人物は、町史編纂委員会において検討を加え選定したものである。原則として故人を取りあげることとした。現存者は全国的に知られた著名人に限った。

歴代村長や村会議員・学校長など、村政や町政に尽した人達については、本稿の他の項目の中でとりあげているので、ここでは割愛した。

軍人については大佐以上の方々ととりあげた。人物の排列は生年月日順にした。

なお、まだ取りあげるべき人物も多いことかと思われるが、調査もれの方にご寛恕願いたい。

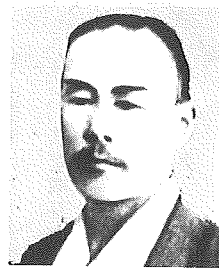
糸山 貞幹（二八三一―一九一九）



佐賀における神道学、国学の権威者として、その名を知られ、特に郷土史に明るく、神社仏閣等に関する研究を行う。天保二年二月

十六日、佐賀郡為重村（現諸富町三重）に糸山主計の長男として生まれる。吉田神道の教えをうけ旧藩時代において、神学寮教頭を務めた。明治維新後、高良神社、田島神社、香椎宮などの権宮司又は宮司となる。その後、佐賀中学校、師範学校で教鞭を取る。学殖が豊富で著書には『淀姫神社雑記』、『増訂樟葉三十六歌仙』、及び『百歌仙』などがある。肥前風土記に関する研究、その他郷土史研究の資料として大いに参考となるべきものが多い。大正八年五月六日没す。享年八八歳、従七位。

江副 靖 臣（一八五一〜一九一五）



江副は嘉永四年、佐賀藩士、野口惣三の三男として佐賀郡大室村（現諸富町）に生まれる。幼名を又四郎のち惣一と改め江副家の養子となる。弘道館に学び、一七歳で江戸詰め、明治維新後、慶応義塾に入り、また横浜で英語学を学んだ。明治七年、二四歳の時、佐賀の役では征韓党に属し、

のち同志と共に戊寅義塾を起こす。これより先、明治五年、初めて『佐賀新聞』を創刊するが幾もなくして廃刊し、明治十六年、佐賀活版社を設立、翌年八月一日、創刊号が出されて以来、幾多の苦節を経て、今日の隆昌を見るに至る。新聞事業のほか、明治十九年には代言人（弁護士）となり、また佐賀取引所設立に奔走する。翌二十年の九州鉄道会社設立では取締役を務め、同成会を組織し、次いで佐賀市制実施のために大

いに尽力する。佐賀市議会にあること、明治二十二年から二十二年間（うち議長十六年）。また県会議員に挙げられること四回（うち議長二回）、明治四十五年五月、衆議院議員に当選する。そのほか起業社を起こし、佐世保新聞社を経営し、或いは欧米を視察するなど多方面に活躍した。大正四年四月二十四日、衆議院議員就任中に没す。享年六四歳、佐賀郡本庄村（現佐賀市）高伝寺に葬る。

糸 山 貞 規（一八六七〜一九三五）



慶応三年七月十一日、佐賀郡为重村（現諸富町三重）において、旧鍋島藩の皇学家糸山貞幹の長男に生まれる。皇学家の伝統ある家風によって培われた清純な真心をもって、力強く生き抜く素質の持ち主であった。長じて、勉学の

人物

志を立てて上京し、明治大学に学び、明治二十三年、同大学法律、政治の二科を卒業。同二十七年、判検事登用第一回試験に合格して司法官試験に任ぜられる。同二十九年、判検事の第二回試験に及第し、予備検事となり、高等官八等に叙せられる。以来各年官等を進み、同三十三年、五等に昇進し、甲府地方裁判所次席検事として異数の抜擢を受け、名検察官として知られた。資性剛直で正理正道の所信に向かつて邁進する行動家で、明治三十五年、その性格が、はからずも物議を起し、あくまでも所信を貫き潔く職を辞し、弁護士となる。また剣道の達人として知られ、当時有数の剣客の中にその名を挙げられていた。大正元年、事務所を東京に移し、弁護士活動を続け、その信望は益々篤くなり、大正六年、東京市麹町（現東京都千代田区）区会議員に挙げられ、政治の面にもその才能と手腕を発揮した。昭和十年十一月十九日死去。享年六八歳。

牟 田 亀 太 郎（一八七五〜一九五五）



海軍少将。明治八年二月十五日、佐賀郡大室村（現諸富町加与丁）において、父守常、母夕子の長男に生まれる。明治三十年十二月、

海軍兵学校を卒業し、明治三十二年二月一日、海軍少尉に任官する。明治三十七年二月五日、日露国交断絶により、千代田艦に乗り組み、韓国仁川港に碇泊し、警備艦として終始同港にあり、旅順口陥落後は、マニラ湾において敵艦隊の出動を偵察、報道を敏活に行い連合艦隊に多大の利益を与え、日本海海戦の際は、敵艦隊降伏受授等の任務を全うする。大正十年十二月一日、海軍少将に昇任する。退官後、佐賀育英会常務理事を務め子弟の教育振興に当たった。昭和三十年八月九日、東京都杉並区で死去。享年八〇歳、従四位勲三等功五級。

松田元武（二八七八〜一九三三）



陸軍歩兵大佐。明治十一年二月二十八日、佐賀郡大堂村（現諸富町太田）において、村会議員、郡会議員などの要職を務め、村治

に功勞した松田祐七の長男として産声をあげる。明治三十一年十一月、陸軍士官学校を卒業し、翌年六月、歩兵少尉に任官。歩兵中尉として、明治三十七年五月から同年十月まで日露戦役に出征する。歩兵第四十八連隊補充隊中隊長、陸軍中央幼年学校生徒隊中隊長、陸軍戸山学校教官、陸軍歩兵学校教導大隊中隊長、歩兵第四十五連隊大隊長、大阪陸軍地方幼年学校長などを歴任。大正十一年二月、歩兵大佐に昇任し、久留米連隊区司令官となる。翌年八月、待命となり、九月、予備役に編入される。昭和八年十二月二十日死去。享年五五歳、正五位勲三等功五級。

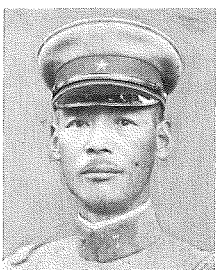
西村熊若（二八七九〜一九四六）



海軍機関大佐。明治十二年二月二日、佐賀郡為重村（現諸富町三重）において、佐賀郡各村組合議員を務めた西村小源太、アイの長男

として生まれる。新北小、佐中を卒業、明治三十一年一月、海軍機関学校に入学後、同三十四年四月、同校を経て、明治三十五年一月、海軍少尉に任官。各所に転任して大正八年十二月一日、海軍機関大佐に任ぜられる。日露戦役の際には、高千穂、瓜生艦に、その後は、和泉、浪速、千代田艦に乗り組み、日独戦の際には、常盤の機関長として又、尼港事件の際には、第三水雷戦隊機関長として出征する。大正十年八月、予備役に編入される。退役後は、東寺井で謡曲を教え、また、酒が好物で酒豪としても知られた。昭和二十一年一月十八日死去。享年六六歳、正五位勲三等功五級。

大木重實（二八八二〜一九五五）



陸軍砲兵大佐。明治十五年八月四日、南川副村大字犬井道（現川副町）に内田藤次、イシの三男として生まれる。長じて、明治四十

二年、新北村大字為重（現諸富町西寺井）大木延建の養子となる。唐津中学を卒業、明治三十一年九月一日、熊本地方幼年学校に入学後、陸軍中央幼年学校を経て士官候補生となり、明治三十七年十月、陸軍士官学校卒業。日露戦争、シベリア出兵、大東亜戦争などに参加する。この間、野戦砲兵第十六連隊補充大隊付、野砲兵第二十一連隊付、野砲兵第二十一連隊大隊副官、野砲兵第二十一連隊中隊長、陸軍士官学校教官、野砲兵第二十五連隊副官、野砲兵第三連隊大隊長、野砲兵第七連隊付、第七師団兵器部長などを歴任。昭和八年八月一日、陸軍砲兵大佐に昇任、待命となるも昭和十

六年十月、臨時召集により下関砲兵連隊補充隊長を命ぜられ西部軍司令部付を経て、昭和十八年四月、召集解除となる。光専寺（東寺井）の山門に直筆による「護命山」のてん刻が掲げられている。昭和三十年十一月二十八日、東京都中野区で死去。享年七三歳、正五位勲三等。

松田国三（二八八三〜一九三五）

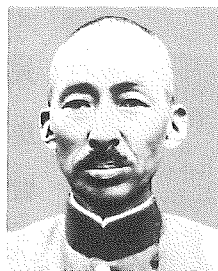


陸軍歩兵少将。松田国三は、陸軍歩兵大佐松田元武の実弟にあたり、明治十六年七月八日、佐賀郡大堂村（現諸富町太田）に生まれる。

明治三十年、東川副尋常小学校を卒業するや、熊本地方幼年学校に入り、陸軍士官学校を卒業。明治三十七年十一月一日、陸軍歩兵少尉に任官し、歩兵第二十四連隊付となる。日露戦役に出征後、中央幼年学校生徒

隊中隊付を経て陸軍大学校へ進み、歩兵第二十四連隊中隊長を務め、大正二年十二月、同校を卒業。日独戦役、満州事変、熱河戦、長城戦などに参加する。この間、陸軍士官学校教官、第十一師団参謀、教育總監部課員、歩兵第四十六連隊大隊長、第十八師団高級参謀、参謀本部部員、朝鮮軍参謀、朝鮮軍高級参謀、近衛歩兵第三連隊長、昭和七年八月、陸軍歩兵少将に昇任、歩兵第十一旅団長、吉林守備隊司令官などを歴任、建國に功勞する。昭和十年七月二十七日、熊本市大江町で死去。享年五二歳、従四位勲二等功三級。

#### 横尾 闊 (二八九二～一九四五)



陸軍砲兵中將。明治二十五年二月二十一日、新北村大字寺井津（現諸富町西寺井）に横尾達次の長男として誕生する。幼少の頃は、西

寺井で村会議員を務めた深町房太郎に育てられる。明治三十八年九月一日、地方幼年学校入校後、中央幼年学校を経て士官候補生となり、大正元年五月、陸軍士官学校を卒業。同年十二月、砲兵少尉に任官。シベリア出兵、満州事変（錦県）、支那事変（中支、満州）、大東亜戦争（満州、比島）などに参加。大正元年十二月、野砲兵第十二連隊付を命ぜられ、その後、野砲兵第十二連隊中隊長、第十二師団副官、独立山砲兵第三連隊付、野戦砲兵学校教官、陸軍野戦砲兵学校教導連隊中隊長、山砲兵第十一連隊大隊長、独立野砲兵第十一大隊長、気球連隊付、山砲兵第十九連隊長、野砲兵第十連隊長などを歴任。比島マツキンレーにおいて、第十四兵器部長として奮戦中、負傷し、昭和二十年四月十六日、小倉陸軍病院において、輝しい戦功を残し生涯を閉じた。時を同じくして、在職中の勲功を称え中將に昇任した。行年五三歳、従四位勲二等功四級。

#### 真島 チモ (二八九二～一九五九)

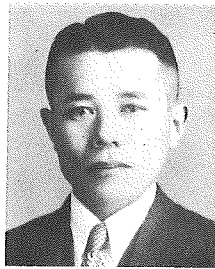


明治二十五年四月十九日 回船問屋「丸屋」を営む、父利吉、母フミの二女として、東川副村大字徳富（現諸富町）に生まれる。幼少

のチモは、明るく、天真爛漫で、わけてもチモの「赤ん坊好き」は並はずれていた。東川副尋常小学校、佐賀成美女学校を卒業し、京都看護学校（同志社看護学校）、横浜ゼネラルホスピタルで高等看護技術を修得した。在日英国大使館から派遣され英領香港政庁付属病院に勤務したのち、大正十一年渡英後、欧州に渡り、昭和三年、近代看護発祥の地、英国ナイチンゲール看護婦学校、同四年、英国王立母性教育専門学校を卒業、さらにスイスその他欧州各地において近代看護学の精粹を研修する。昭和四年十二月帰国後は、東京市乳幼児保護協会付属児童相談所主任、大阪朝日新聞

社社会事業団保健課長、陸軍小倉造兵廠の希望により朝日新聞西部本社厚生事業団、小倉記念病院付属看護婦講習所講師などを歴任。昭和二十五年六月、参議院議員選挙に立候補したが惜しくも落選した。昭和二十六年、優良保健婦として厚生大臣表彰を受ける。昭和二十八年、家族計画会議出席のためスウェーデンへ、国際社会主義会議に日本代表としてストックホルムへ、さらに昭和三十三年、ストックホルムで開催された世界平和会議に日本産児調節連盟代表として選ばれるほか、看護婦学校の強化、後輩の指導、公衆衛生の普及、農村における母性指導など社会事業の発展に努め、常にその歩みは先導的存在であった。昭和三十四年二月二十四日、真島チモは、諸富町諸富津において、六十六年の波瀾の生涯を閉じた。死後二年目の昭和三十六年、真島チモを讃迎思慕する全国の同志相集り「真島先生の胸像」が建立された。現在、福岡県立看護専門学校（福岡県大宰府市）の構内に安置されている。

江口 順一 (一八九二〜一九四七)



明治二十六年四月十八日

新北村大字为重(現諸富町

三重)において、江口栄吉、

カツの長男に生まれる。大

正三年九月、東大法科大学

政治科に入る。東大法科時代の同五年十月、文官高等

試験にパスした秀才。同六年七月、同校を卒業後、大

蔵属銀行局に入り、副司税官・南税務署長、司税官・

玉造税務署長、南税務署長、税務監督局事務官・熊本

税務監督局経理部長、税関事務官・横浜税関総務課長、

税務監督局事務官・東京税務監督局間税部長、銀行検

査官、営繕管財局書記官・国有財産課長、大臣官房文

書課長などを務め、昭和十四年五月、営繕管財局総務

部長を最後に退官。直ちに東洋拓殖会社理事、同十六

年七月、樺太開発会社副社長、同十八年六月、日本製

鉄会社取締役経理局長などの要職に就き、将来を嘱望

されていたが、昭和二十二年九月十九日、東京都世田ヶ  
谷区で早世した。享年五十五歳。

小柳 佐八 (一八九二〜一九八〇)



明治二十六年七月一日、

父申吉、母トミの二男とし

て、新北村大字山領(現諸

富町小杭)に生まれる。明

治三十六年、新北尋常小学

校を卒業、川副高等小学校、神埼町の神陽学館、龍谷

中学校、佐賀県師範学校本科第二部を経て、大正十二

年、師範学校研究科第二部(理科)を修了する。これ

より先、大正三年三月、小学校本科正教員の免許を得

て、与賀高等小学校赴任以来訓導、首席訓導を務め、

佐賀県公立小学校長、東川副国民学校長、公立青年学

校長(高等官六等待遇)、東川副村立実業青年学校長、

独立青年学校長などを歴任。教員在職三十三年の長

きに亘る。大正末年から有明海の魚介類研究に取り組

み、昭和三年『有明海産物調査』の報告を出版する。

歴史学にも造詣深く、昭和九年『わが村(巨勢村史)』

を発刊した。また、近世佐賀藩の御用商人の成富家・

弥富家の史料発掘研究にも尽力され、郷土史研究家と

しても知られた。教職退職後は、東川副村公民館長、

民生児童委員、司法保護司、日本退職公務員連盟評議

員、佐賀県退職公務員連盟理事長などの職を全うする。

この間、教育の基調となる著書が多数ある。その中に

『東川副郷土誌』を見ることができ、また著書『よ

ろこびの日暮し』の中に、先生の人生教訓と察する短

歌がある。

教え子と 共に課題を進めつつ

歩み来にけり 学び屋の窓

昭和五十五年六月二十七日、佐賀市で死去。享年八七

歳、勲七等。

山田 與吉 (一八九四〜一九五六)



陸軍航空兵大佐。明治二

十七年四月六日、東川副村

大字大堂(現諸富町太田)

において、山田栄吉、ツマ

の第二子として誕生する。

陸軍士官学校第三十期生。大正七年十二月、歩兵少尉

に任官。直ちに歩兵第三十八連隊付となり、翌年四月、

天津に派兵される。昭和八年二月から昭和二十年一月

までの間、満州事変、支那事変、大東亜戦争などに参

加。この間、気球隊付、熊谷陸軍飛行学校副官、第五

野戦航空廠付、第十五野戦航空廠付、大刀洗陸軍飛行

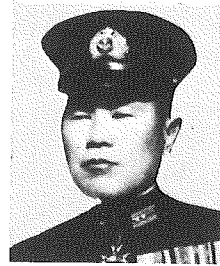
学校材料廠長、第五航空地区司令官、岐阜県各務原陸

軍航空廠修理部長などを歴任。昭和二十年六月、陸軍

航空兵大佐に昇任する。昭和三十一年三月十七日死去。

享年六一歳、正五位勲三等。

牟田 菊雄 (二八九六〜一九七九)



海軍大佐。牟田菊雄は海軍少将牟田亀太郎の従弟にあたり、明治二十九年三月五日、東川副村大字大堂(現諸富町加与丁)に、父辰五郎、母カ子の二男として誕生する。東川副小、芙蓉高等学校卒業後、機関少尉候補生となり、同八年八月、海軍機関少尉に任官する。支那事変、太平洋戦争などに従軍。なかでも、昭和十六年十二月八日、ハワイ奇襲作戦に参加する。松、榊、杉、蓬各駆逐艦機関長、大村航空隊分隊長、空母鳳翔整備長、館山、木更津、鈴鹿、鹿島各航空隊整備長、第五航空隊機関長などを務め、昭和十六年十月、海軍大佐に昇任。その後、空母翔鶴、瑞鶴塔乗、南西方面海軍航空廠第一支隊長、航空本部監督官、近畿軍需管理部第一管理長などを歴任

する。昭和五十四年十二月六日、東京都目黒区で死去。享年八三歳、従四位勲三等。

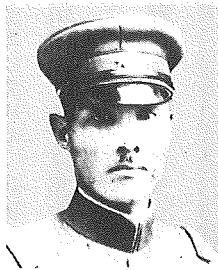
土師 勝次 (二八九七〜一九四六)



明治三十年三月三日、東川副村大字大堂(現諸富町土師)において、農業を営み、村会議員を務めた土師 勿吉郎、エツの長男に生まれる。東川副小、佐中を経て、大正三年四月、明治大学予科に入学し、同八年三月、同大学法学部を卒業する。台湾総督府専売局勤務を振出しに、台中州埔里専売支局長、台南州嘉義専売支局長、台北州基隆専売支局長などを務める。昭和七年十月、満州国建国に当たり招聘官史として渡満。満州国經濟部専売総局、同十五年、満州国奉天省四平専売署副署長、同十八年、満州国通化省通化専売署副署長などを歴任し、薦任官に

任ぜられる。終戦後、通化市日本人居留民会会長に推され、居留民の世話に奔走する。はからずも、昭和二十一年二月五日、通化市において起きた通化事件に遭遇し、不慮の死をとげた。行年四八歳。

青木 二郎 (二八九七〜一九四四)  
陸軍歩兵大佐。東川副村長などの要職を務めた青木善太郎の二男として、明治三十年八月二十二日、東川副村大字大堂(現諸富町太田)に生まれる。大正八年五月、陸軍士官学校を卒業し、同年十二月、歩兵少尉に任官。大正十四年十二月から翌年一月まで鮮満国境警備に従事する。昭和九年十一月、第四独立守備隊副官として満州事変に参加する。その後、昭和十三年四月、歩兵第八十一連隊大隊長となり支那事変、昭和十七年、独立歩兵大隊長とし



て支那本土作戦などの指揮をとる。南支那及び南方戦線において第十一揚陸隊長、第五十六碇泊場司令官などを歴任。昭和十九年八月一日、陸軍歩兵大佐に任ぜられるが、戦火は一段と烈しく、同年八月二十一日、マニラ南方第十二陸軍病院において、日本軍人としての輝かしい生涯の幕を閉じた。行年四六歳、正五位勲三等功四級。

等功四級。

林 雅男 (二八九八〜一九七〇)



陸軍航空兵大佐。明治三十一年三月九日、東川副村大字大堂(現諸富町太田)に教育者林作一、サイの長男として生まれる。大正八年

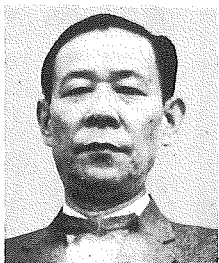
人物

五月、陸軍士官学校を卒業し、同年十二月、砲兵少尉として任官し、直ちに、山砲兵第三連隊付となった。軍歴の主なものとして、独立山砲兵第三連隊付、台湾

山砲兵大隊付、山砲兵第九連隊付、飛行第十六連隊付、飛行第十六連隊副官、水戸陸軍航空通信学校材料廠長、陸軍航空廠満州支廠員、関東軍補給參謀付、マニラ陸軍航空廠付、陸軍航空工廠課長などを歴任。昭和二十年六月、陸軍航空兵大佐に昇任する。終戦後、同胞援護会の昭和郷を設立し、戦災者、引揚者の收容、その援護に努めた。昭和四十六年一月二十五日、東京都立川市で死去。享年七十二歳、従五位勲四等。

### 野田三夫（一九〇一〜一九七二）

明治三十四年八月二十二



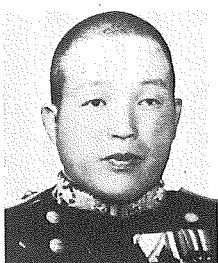
日、東川副村大字大堂（現諸富町加与丁）において、野田亀吉、ノフの三男に生まれる。大正十五年三月、

東大法学部を卒業。昭和二年十二月、長崎地裁を振出しに、大分、福岡の各地裁を回って、昭和十六年五月、

長崎控訴院、福岡控訴院、福岡地裁などの判事を務め、昭和二十七年、福岡高裁判事となる。昭和三十二年九月、松江地方家裁、長崎地方家裁の各所長を歴任。昭和四十一年八月、判事定年退官。同年十月、弁護士名簿登録をするも、翌年八月、登録を取消し、同年九月、佐賀簡裁判事の職に就き、司法官としての最後の敏腕を奮い、昭和四十五年十二月、退職する。彼が司法官を志したのは「会社生活は真つ平ごめん」とこの道に入ったという。昭和四十六年四月十三日、佐賀市で死去した。享年六九歳、勲二等。

### 松尾景輔（一九〇二〜一九四三）

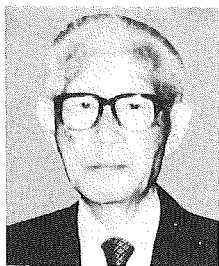
海軍大佐。明治三十五年



二月十一日、新北村大字寺井津（現諸富町西脇）において、魚市場を経営し、一方では、村会議員、漁業組

合長等の要職を務めた松尾勝太郎、タメの長男として生まれる。新北小、佐中を経て、大正九年八月、海軍兵学校に入学し、同十二年七月、同校を卒業。時を同じくして、海軍少尉候補生となり、翌年十二月、海軍少尉に任官、第二十三駆逐隊付となる。漢口陸戦隊、上海海軍特別陸戦隊にあつては支那事変に従軍し、昭和十七年十一月一日、海軍中佐に任ぜられる。この間、陸奥乗り組み、第一遣付艦隊司令部付、襟裳分隊長、横須賀鎮守府付、多摩分隊長、若葉砲術長、呉海軍団分隊長、上海特別陸戦隊付、呉海軍団服務などを歴任する。昭和十八年五月二日、ギルバート諸島マキン・タラワ島において、米軍最強を誇る第二海兵師団と日本海軍特別陸戦隊の死闘がくりひろげられ、第三特別根拠地隊参謀として活躍中、戦死した。在職中の戦功により海軍大佐に昇進する。行年四一歳、正五位勲三等功四級。

### 江口辰五郎（一九〇二〜）



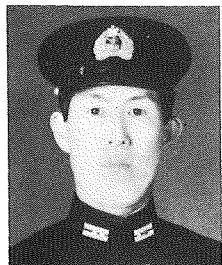
海岸や河川敷などを散歩すると、ヒトデみたいな形をしたブロック・テトラポッドが、消波のために積んであるのが目に入る。テトラ

ポッドはフランスの産である。アルプスのふもとグルノーブルのネールピックという水力発電会社で考案された。テトラはギリシャ語で「四つの」ポッドは「足」。その卓抜な機能性に目をつけたのが江口辰五郎。江口は明治三十五年八月四日、東川副村大字諸富津（現諸富町徳富）で材木商及び製材業を経営し、村会議員を務めた江口浅次郎、チエの五男として生まれる。佐中、佐高、京大と進む。昭和二年、京大工学部土木工学科を卒業。同年、内務省に入り大阪土木出張所、下関土木出張所、関門海峡改良事務所、昭和十六年、荻田港修築事務所長、運輸省第四港湾建設部洞海湾工事事務



所長兼小倉工事事務所長などを歴任。昭和二十五年、日本製鉄八幡製鉄所土木部長、同三十一年、建設局副局長兼土木部長、同三十三年、参与委嘱などを経て、昭和三十六年五月、日本テトラポッドの初代社長に就任し、テトラポッドの専用実施権をいち早く手に入れた。二十年が過ぎて年間消費量五万トから七〇〇万トに伸び全消費ブロック消費量の半分に近く、業績の拡大に努めた。昭和五十二年六月、同社取締役相談役、同五十五年六月、相談役就任。この間、昭和三十七年三月、『製鉄工業港計画論』をまとめ、工学博士の学位を授けられ、同四十三年、八幡製鉄所退任、同四十五年十一月、運輸大臣より交通文化賞、同四十九年六月、テトラポッドの普及功労者として、フランス政府よりレジオン・ドヌール勲章を授与された。著書に『佐賀平野の水と土』がある。同じ土木屋の先駆者である、成富兵庫茂安の水利事業をまとめた本である。技術士、勲三等。

### 三船俊郎（二九〇三〜一九四四）



海軍大佐。明治三十六年八月十日、新北村大字山領（現諸富町福田）において、農業を営む蒲原忠六、トラの二男として生まれる。長じて、昭和十四年二月、神奈川県横須賀市に居住する三船家の養子となる。新北小、佐中を経て、大正十年八月、海軍兵学校に入学し、同十三年七月二十四日、同校を卒業すると同時に、海軍少尉候補生となり、大正十四年十二月一日、海軍少尉に任官。第四号掃海艇長、海風駆逐艦長などを歴任。昭和十九年十二月四日、岸波駆逐艦長として活躍中、比島パラワン島北西方二〇〇㌫において戦死。在職中の戦功により海軍大佐に昇任する。行年四一歳、正五位勲三等。

### 野田普一郎（二九〇四〜）



普一郎は法曹家野田三夫の従弟にあたり、三夫と同じ志を立て、この道に入る。明治三十七年三月二十日、東川副村大字大堂（現諸富

大村市に住居し、弁護士として活躍している。勲二等。

### 中島征帆（二九〇九〜一九七九）



中島征帆は明治四十二年六月十三日、新北村大字寺井津（現諸富町浮盃）に、中島謙太の長男として生まれる。佐中から一高、東大

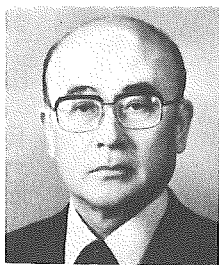
人物

町加与丁）に、今朝太郎、コトの長男として生まれる。昭和五年三月、中大法科卒業後、しばらく弁護士をしていたが、昭和十二年、朝鮮に渡り、朝鮮総督府、平壤地方法院、大田地方法院忠州支庁、大田地方法院洪城支庁などの判事を歴任した。戦後、昭和二十一年九月、長崎地裁、長崎地裁大村支部の判事を務め、昭和三十一年十一月、福岡地方家裁大牟田支部、宮崎地方家裁などの判事をしたのち、昭和四十年四月、長崎地方家裁佐世保支部長となり、昭和四十四年三月、判事定年退官。のち別府、長崎の各簡裁判事を歴任し、昭和四十九年三月、簡裁判事を定年退官した。退官後、

に進んだ秀才。昭和七年三月、東大経済学部卒業と同時に、商工省工務局に入り、化学局合成課、軍需省整備局整備課長、燃料局石油課長、経済安定本部動力局次長、福岡商工局商工部長、石炭庁開発局長、資源庁石炭管理局長、大阪通商産業局長などの重要ポストを回り、昭和二十八年一月、公益事業局長の職に就いた。石炭管理局长時代は、その卓越した頭脳と手腕を石炭行政にふるい、戦後の荒廃した炭界をよみがえらせたのは有名である。官界から身を引いてからは、実業界

に転じ、昭和三十年十二月、常盤共同火力発電専務、「日本航空機振興法」に伴い設立された官民合同の日本航空機製造専務、日本映画輸出振興協会常務、石炭鉱業合理化事業団理事長、日本情報処理センター会長、日本電子計算機社長などを歴任。官界でも実業界でも常に、トップクラスのコースをたどった花やかな経歴の持ち主である。昭和二十六年、海外の鉱害賠償制度研究のため欧米各国を視察し、当時の外遊記として『よみがえる西ドイツ』の著書がある。昭和五十四年四月一日死去。享年六九歳。

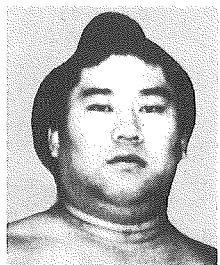
### 松田 武彦（一九二一〜）



陸軍大佐松田元武の四男として、大正十年九月十四日、東川副村大字大堂（現諸富町太田）に生まれる。佐賀師範附属小、佐中、佐

高、東大と進む。昭和十八年九月、東大工学部造兵学科（現精密機械工学科）を卒業し、特別研修生として、同大学大学院工学研究科において、機械工学を修め、米国カーネギー工科大学工業経営大学院に留学、工業経営の技術の精粹を研究する。昭和三十年十二月、東京工業大学工学部経営工学科助教となり、昭和三十一年十月、同大学教授、昭和五十三年四月、同大学院総合理工学研究科長などを務め、昭和五十六年十月、同大学長の要職に就き、その大いなる学識と抱負をもって活躍をしている。これより先、昭和三十七年三月、東京工大より、『シミュレーションによる組織分析に関する研究』をまとめ、工学博士の学位を授けられる。また多年、大学教授として工学者の養成に尽力するほか、行政管理庁顧問、国際オペレーションズ・リサーチ学会連合会長、日本生産性本部経営アカデミー学長、日本オペレーションズ・リサーチ会長などを歴任し、我が国の経営管理の発展にも貢献する。

### 大 麟 麟（一九四二〜）



力士。本名堤隆能。「江戸の大関より郷土の三段目」ということばがある。まして、ご当所大麒麟は真正正銘の天下の大関である。堤

隆能は昭和十七年六月二十日、諸富町徳富において、整骨師堤善治、カツの三男として生まれる。少年時代の彼は、知、体、文字通り心身ともにすぐれた健康優良児で、高校進学か角界入りかでずいぶん悩むが、昭和三十三年の春、高校入試の前日、土俵に生きる決意をし、大相撲二所ノ関部屋に入門。昭和三十七年七月、二十歳の時、シコ名も麒麟児と改め、晴れて関取（十両）となった。昭和三十八年五月、十三勝二敗で十両優勝、同年九月、新入幕、その場所けいこ中に左足骨折で、一度は幕下まで落ちたが、不屈の闘志で盛り返し、持ち前の足腰のよさと前さばきのうまさで頭角を

現し、横綱柏戸（現鏡山親方）をしばしば破って、大物キラーの異名をとった。昭和四十五年五月、西関脇で大麒麟と改名、同年十一月、晴れて大関に昇進、二十五場所務めた。幕内在位中、殊勲賞五回、技能賞四回を獲得する。昭和四十九年十一月に引退し、年寄・押尾川を襲名。二年後、東京都江東区木場に押尾川部屋を創立、親方として、師匠・二所ノ関が果たせなかつた望みと、そして、自分が達せなかつた今一つ最高位・横綱の夢を、青葉城、麒麟ノ嵐、益荒雄など四十数名の弟子に託して養成に力を注いでいる。また、日本相撲協会の監察委員を務め、大相撲の発展にも尽力している。



大関昇進披露祝賀会（諸中体育館）

西 暦	年 号	町 の で き ごと	国・県等 の で き ごと
前八〇〇〇ころ	縄文早期		縄文時代の文化と生活 ● 縄文式土器の製作、使用 ● 狩猟漁撈、自然採集経済 縄文前期遺跡
前五〇〇〇ころ	縄文前期		縄文中期遺跡
前三〇〇〇ころ	縄文中期	○ 前三五〇〇年頃有明海の水位が現水位とほぼ同じになる	縄文後期遺跡
前二〇〇〇ころ	縄文後期		唐津菜畑遺跡で農耕確認
前一〇〇〇ころ	縄文晩期		弥生時代の文化と生活
前三〇〇ころ	弥生前期		● 弥生式土器の製作、使用 ● 青銅器、鉄器の製作、使用 ● 水稻耕作の普及 弥生前期遺跡(千代田町上黒井貝塚、
前二一九		○ 秦の始皇帝の使徐福、不老不死の妙薬を求め来朝。寺井津に上陸し、金山に至るとの伝説あり	

年 表

年表作成については、『佐賀県史』、『佐賀市史』、『川副町誌』、『東与賀町史』、『佐賀の百年・県政百年歴史年表』、『佐賀県』、『佐賀県大百科事典・佐賀県歴史年表』、『佐賀新聞社』、『日本史年表』、『岩波書店』、『日本史小年表』、『山川出版社』などを参考にした。  
(5・1は月日、5・は月、○印は月日不明を表す)

参考および引用した文献・資料

書 名	編 集 者	発 行 所	発 行 年
佐賀県軍人名誉肖像録	内田安蔵	東江堂	明治四十一年
佐賀県官民肖像録	富谷益蔵	博進社	大正四年
在京佐賀の代表的人物	笠原廣	喜文堂	大正七年
郡 勢 大 観	植松唐泉	民友社出版部	昭和三年
先 覚 者 小 伝	久保源六	肥前史談会	昭和四年
昭和風土記	篠田雀	東海新聞社地方自治調査会	昭和七年
東川副村誌・前編	小柳佐八	小柳佐八	昭和十四年
栄城人国記	佐賀新聞社	佐賀新聞社	昭和三十四年
諸富町広報	甲斐敏夫	諸富町公民館	昭和三十四年
よろこびの日暮し	小柳佐八	小柳佐八	昭和四十六年
タラフ米海兵隊と恐怖の島	ヘンリー・I・ショー	サンケイ新聞社出版局	昭和四十六年
市町村人物風土記	佐賀新聞社	佐賀新聞社	昭和四十七年
昭和の戦歴・軍魂	西村健吾	政経調査会	昭和五十四年
続・人間風景	朝日新聞社	朝日新聞社	昭和五十六年
佐賀が生んだ幕末明治人の群像	福岡博	よみがえり佐賀県実行委員会	昭和五十六年
緋の肖像真島智茂伝	小川保雄	昭森社	昭和五十六年
私のアルバム	佐賀新聞社	佐賀新聞社	昭和五十七年
人事興信録	武内甲子雄	憐人事興信所	昭和五十八年
佐賀大百科事典	佐賀新聞社、佐賀県大百科事典編集委員会	佐賀新聞社	昭和五十八年